



# 未来への教科書

~For Our Children~

## 出前授業



主催 :  復興支援メディア隊  
(事務局: 合同会社アースボイスプロジェクト)

後援 :  MITSUI & CO.

企画協力 : **BS12 トゥエルビ**

 復興支援メディア隊  
Media Team

## きずな

共存共栄 堀 有伸さん	(ボリメンタルクリニック院長 福島NPO法人みんなのとなり組理事長・精神科医【福島県】)
人を助ける 長 純一さん	(石巻市立病院開成仮診療所所長 包括ケアセンター所長・内科医)【宮城県】
地域との繋がり 及川 武宏さん	(株式会社スリービーケース 代表取締役)【岩手県】
地域との繋がり 佐藤 桢平さん	(一関平泉イン・アウトバウンド推進協議会 ディレクター 一関移住プランディング実行委員会プロジェクトマネージャー・岩手わかわフェス実行委員会実行委員長)【東京都】

## ものづくり

モノをつくる 渡邊 さやかさん	(一般社団法人 re:terra(リトーラ)代表)【岩手県】
復興とは? 本田 勝之助さん	(本田屋本店有限会社 代表取締役)【福島県】
復興とは? 岩佐 大輝さん	(株式会社GRA 代表取締役)【岩手県】
自然との共生 嶋山 信さん	(NPO法人森は海の恋人副理事長)【福島県】
伝統文化を生かす・守る 長谷川 純一さん・清水 琢さん	(人と種を繋ぐ会津伝統野菜)【福島県】
自然との共生 八木 健一郎さん	(株式会社三陸とねて市場 代表取締役)【岩手県】
食を守る 阿部 隆昭さん	(株式会社グランバファーム 株式会社グランバシステムエンジニアリング 会長)【神奈川県】
食を守る 高橋 博之さん	(NPO法人東北開拓 代表理事)【岩手県】

## くらし

三井物産の東日本大震災復興支援に関する2020年までの取組方針  
自由帳・ワークシート

27 26 24 22 20 18 16 14 12 10 8 6 4 2

「未来への教科書～For Our Children～」は、震災直後から被災地の今、課題、未来をテーマに制作していたテレビ番組で、BS12ch TwellTVで放送しました。

今回の出前授業は、これまでに番組に登場していただいた人の中から、本企画にご賛同頂いた11人と1組の取り組みを「教科書」にし、登場人物と、実際に取材に当たった復興支援メディア隊のメンバーと一緒に、中学校、高等学校を訪問し、一日先生として「生きるを育む」をテーマに授業をします。

出前授業は対象地域の中学校、高等学校から受講希望を募り、選考した学校に対して実施します。

私たちは子どもたちに大震災、そして今を生きる一日先生と生徒が直接対面することで、自ら考え行動する「生きる」力を育む一助となればと考えています。

復興支援メディア隊 代表 榎田竜路

## 震災以前のこと

東京にある大学病院の病棟で勤務をしていました。地震が起きた時も病院にいましたが、長く強く揺れたので驚きました。

## 震災から現在

病院には被害はありませんでしたが、東京で過ごしながらニュースなどを通して次々と入ってくる情報を、とんでもない事が起きてしまったという、気持ちの整理がつかない状況で見ていました。

その後、環境問題に取り組んでいた親友が、原発事故に強い衝撃を受け、福島県を支援するために相当熱心に活動するようになりました。彼に誘われるような形で福島に足を運ぶようになりました。11月頃でしたから、震災直後から動かされた人たちから比べると、随分ゆっくりなスタートでした。

直接的な被災地の被害も大きいですけれど、私はどうしても人の心とか目に見えない部分がどういう仕組みでどういう風に動いているかという所をとても気にする人間なんです。原発事故とそれに関係する様々な状況を目の当たりにして、こういうのを繰り返すうちに日本は大変な事になると危機感を持ちました。東京で暮らしてもその不安は解消されないだろう。幸い医師免許を持っていたので現地に飛び込んで受け入れてくれる場所があると感じたので、新しい勤務先を決め、平成24年の4月に南相馬に引っ越しました。この地域の精神科というのは、よほど重症にならないと患者さんは病院に来ないんです。なので、一見元気そうに見える人でも放置すると深刻な事が起きるリスクを抱えている。そこにアプローチしたいと思いました。

私が勤務を始めた4月中旬から旧警戒区域への住民の一時立ち入りが許可されるようになりました。20キロ圏内といわれている所

## 心理学の立場から 地域のお手伝いを

ほりメンタルクリニック院長  
福島NPO法人みんなのとなり組理事長・精神科医  
**堀 有伸**さん  
【福島県】

きずな

共存



## 堀 有伸さん

精神科医の堀さんは、南相馬で様々な予防医学的な取り組みを試みている。ラジオ体操や心をケアするワークショップ、一昨年は医療福祉に携わる人を中心としたNPO法人みんなのとなり組を立ち上げ、理事長として活動をしている。被災した人やそれを支援する人の精神的な負担、ケアする取り組みを語っていただく。

### 中高校生へのメッセージ

広く心を開いて色々な人に影響を受ける、あるいは周りの話題になってしまってはいる事を取り組む事も大事ですが、自分をしっかりと持って、何と言わっても頑固に本当に自分の好きな事、やりたい事、欲しいものを追求する事も大切です。他の人にとって地味でも、自分にとって大切な事は大事にしてほしいですね。

## 将来のビジョン

私が一人で出来るのは精神医療に関して抽象的な所もある特殊技術や知識、テクニックなので、正直理解してくれる人は少ないけど、分かってくれる人が少しずつ増えていく事で環境は変わっていくと思っています。他にも多くの人のご理解とご協力を得ながら、広く運動を通じて健康への意識を高め、人と人の繋がりを強めるようなラジオ体操やウォーキング教室などの活動を行っています。それらと認知療法をはじめとした精神医学の技法が結び付いてくると良いなと思っています。

私の本職が精神科医で精神病理学や認知療法のような心理学の立場からこの地域にお手伝いしたいというのが基本的なスタンスです。本当に複雑な問題が起きているが、ゴチャゴチャになつたまま整理されていません。それを一つ一つほぐしていくという作業が私の出来ることだと思っています。

私の本職が精神科医で精神病理学や認知療法のような心理学の立場からこの地域にお手伝いしたいというのが基本的なスタンスです。本当に複雑な問題が起きているが、ゴチャゴチャになつたまま整理されていません。それを一つ一つほぐしていくという作業が私の出来ることだと思っています。

震災後、復興公営住宅の建設が進み、仮設住宅からの転居が進む中、長さんは住民たちの中に震災前にあった「ご近所さん」のような関係を構築し、住民同士のコミュニケーションが取れる新生活こそが必要だと考え、取り組みを始めた。復興とともに変わっていく地域のコミュニティ。医師の立場から見た、人や地域のつながりの大切さを語つていただく。

長純一さん

中高校生へのメッセージ  
保健・医療・福祉の領域の仕事は、地方の被災した地域で最も必要とされる仕事です。大変な仕事だけれど、その分、やりがいもある。将来の職業の選択肢のひとつに、考えてみてください。



将来のビジョン

9月に再建された市立病院は、総合診療・地域医療が柱となり、その育成に力を入れることになつております。当初よりの大きな目的でしたら、実際若い医師が集まつてきています。地域医療を目指す若い医師・医療者の育成に力を入れていく予定です。

「復興」はいつか終わります。それまでに、自治体と医療、福祉関係者、コミュニティの力で支える仕組みづくりをしないといけない。これは被災地だけでなく、日本が必要とする取り組みだと考えています。

また、熊本地震でも、被災地での復興と地域包括ケア構築のため少しでもお役に立てればと足を運び、被災地の医療関係者と連携して支援を続けています。この活動はこれからも続けていきます。

問題の改善につながると考えたのです。また、石巻で在宅医療や保健活動のノウハウを持った医療者を育成すれば、他の地域やへき地、被災地などに送り出していくことも可能だとも考えました。

身近な命の問題を大事にした復興になるよう、心に寄り添い生活支援をする仕組みを作らなきやいけないと強い思いで活動を続けました。2013年、保健・医療・福祉の連携と、支え合う地域づくりと一緒に考える地域包括ケアが重要政策となりましたが、実際の被災地の現状は、まだまだ厳しいものがあります。

仮設に暮らす人たちの健康状態の悪化や、コミュニティの再生など、まだまだ深刻な状況は続いているのです。表には出さないけれども、心に傷を負っている人も多く、少しでもそれを和らげようと活動を続けています。現在の診療所も当面は継続されますが、その後のことは詳細に決まってはいません。



丁巳年

地震が起きたときは、限界集落といわれる山間地域で訪問診療の

地震が起きたときは、隣界集落といわれる山間盆地で言語混じりの言葉を最もでした。診療所に戻り、地震の詳細を知りました。

ゴールデンウイークに、長野県の医療チームの一員として5日ほどの日程で石巻に入りました。これは石巻を選んだのではなく、派遣された先が石巻でした。今思うと、石巻との縁はここから始まりました。佐久に戻り、実行委員長を務めていた在宅ケアの全国大会を9月に

久病院での取り組みで得た経験を被災地支援に生かしたいという思いから、石巻市立病院に相談し、巨大な開成・南境の仮設住宅に開成仮診療所を開設していただきました。2012年5月のことです。

被災して劣悪な環境にいる人たちを、医療へのアクセスが容易な場所で集中的に支援すること、そして、診療所が近接していくとも、精神的なダメージや貧困から医療につながらなくなってしまう多くの人がいるので、行政の被災者支援と連携しながら、保健活動や生活支援を行っていくことが重要だと考えていました。

目の前の災害の状況は本当に悲惨でした。しかし、これまでの経験から、医療の問題といつよりはむしろ、保健や福祉の観点から見たり、

## 自分で育てたブドウで 大船渡のワインをつくる

Three Peaks Winery（スリーピークスワイナリー）代表

及川 武宏 さん

【岩手県】

## 震災以前のこと

私は大船渡の生まれですが、震災当時は東京のコンサルティング会社で企業関係のコンサルタントをしていました。職場は新宿の高層ビル群の中にあるオフィス。辞めてバツクパックカーズという格安のゲストハウスを作ろうと考えていた矢先に地震が起きました。

## 震災から現在

当日は新宿のオフィスにいました。14階でしたのでかなり揺れました。徒歩とタクシーでやつとのことで埼玉の自宅に帰りました。古里の大船渡が大変な事になつてるのはニュースで分かっていました。実家の両親と連絡が取れたのは2日後の夜、東北にいる2人の弟も幸い無事でした。

5月に会社を辞めるまでは被災地に物資を運ぶなど、個人で支援活動を続けました。その後、東日本大震災復興支援財団に入り、最初に高校生向けの奨学金事業を作りました。震災が起きる前の環境は当然無くなりましたが、その環境によつて自分がやりたい事が出来なくなつた高校生が多くなると思ったんです。両親が働く環境がなくなつて自分もバイトをしなきゃいけない、その為に学校に行くことが出来ない。そういう子どもを一人でも無くそうと、高校生が夢を諦めなくていいように、返済はいらない給付型の奨学金を作りました。

実は震災が起きた数年前からバツクパックカーズとともに、地元でのワイナリーの構想も温めしていました。財団の事業をやりながら地元に出来る事をやろうと、大船渡に戻る決心をしました。地域に外国人を呼びたいと思っていたんですね。僕もそうでしたが、大船渡の子どもたちは外の世界を知らない。幼い時から色んな視野を広げてもらいた



及川 武宏 さん

及川さんは震災後に東日本大震災復興支援財団に所属

後、地元である大船渡市に戻った。三陸を思い出す美味

しいワインを作りたいといつ思いから、ブドウ畑を始めた。

た。リンゴ畠も譲り受け、シードルの開発も進めている。

将来はワインリーを通してこの地に多くの外国人が訪れる、

子どもたちが刺激し合える場所になつて欲しいと願う及

川さんに地域と農業の繋がりについて語ついていただく。

### 中高校生へのメッセージ

過去の事とかあまり考えずに未来をしっかり見て欲しい。今、自分が何をやりたいかを常に問いつけて、やりたい事を必死にやって欲しい。今、本当に何が出来るか、何がしたいか、自分の好きな事を好きなだけやってほしいなと思います。

まずワインに関しては大船渡市内にワイナリーを作つて、自分で育てたブドウで大船渡のワインを作りたいというのがここ数年の目標。次に、子どものために交流人口を増やしながら三陸リアス海岸エリアにワインバーを作りたい。大船渡市つてスペインの小さな町と姉妹都市なんです。さらにリアス海岸もスペインが発祥なので、漠然とですが、その繋がりも生かして、世界の文化も受け入れて融合したものを作れないかなというビジョンもあります。

### 将来のビジョン

2013年5月、スリーピークスワイナリーを立ち上げました。ブドウは植えてから収穫できるまで3年ほど掛かるので、他の農園から買い付けた果実で岩手県内の醸造会社でつくったワインを売つています。陸前高田市にあるリンゴ園も引き継ぎました。リンゴ園の木は老木が多く、手間はかかるんですが、美味しいリンゴがなるんです。財団の仕事をも継続していく、宮城のジュニアアスリート育成事業つていうスポーツを通して人材を育成する事業もやつています。

# 地域を元気に！

## 震災以前のこと

岩手県一関市で生まれ、野球や駅伝、応援団などの活動をしながら高校まで地元で育ちました。明治大学に進学し、地域づくりや農山漁村政策などを学ぶと同時に、三木武夫元首相など、政財界に多くの人々を輩出してきた明大最古の「雄弁部」で活動していました。

佐藤 桢平さん【東京都】

一関平泉イン・アウトバウンド推進協議会 ディレクター  
一関移住プランディング実行委員会プロジェクトマネージャー  
岩手わかすフェス実行委員会 実行委員長  
(取材時・株式会社ココロココロマチ営業部)



## 震災から現在

震災のあつた3月は大学1年生が終わろうとしている時で、岩手に帰省して、岩手県議会議員（現・「東北食べる通信」編集長）の高橋博之さんの事務所で、インターンをしていました。事務作業をしていた時に地震が起き、非常に長く揺れが続きました。地震の状況は把握できなまま、事務所内に散乱したものの片付けをし、夜になつて津波の被害のことを知りました。

翌日、実家に戻つて片付けを手伝いました。実家は内陸部ですが、山を一つ越えた陸前高田が甚大な被害を受けていることを知り、支援活動に動くことができる地元の知人や友人とボランティア活動を始めました。活動の柱は、遠方から届く物資を個人宅やみんなの避難所へ運ぶ支援、県外から支援に来る人のアテンド、復興支援関連のネットワークづくりの3本。4月中頃まで地元で活動を続け、東京に戻つてからは、被災県出身の学生を中心とした地域支援の学生団体「ARCH」を立ち上げ、活動の幅を広げました。

その後も大学を1年間休学し、岩手を中心に、東北各地の復興事業やプロジェクトに参画したのですが、活動を続けて痛感したことは、平和な日常はとても尊いということ、大自然の前で人間や文明は本当に無力だということです。自分自身の価値観が大きく変わると同時に、世の中のあり方を考え直さないといけないという思いが強く湧いてきました。

2014年4月、まだ大学在学中でしたが、地域プロモーションを手掛ける株式会社ココロマチに入社しました。入社後も「ローカル」「東北・岩手」「震災復興」「地域づくり」などをテーマに、今も個人的な活動を続けています。震災で失ったものはたくさんあるのですが、それ以上に得たものが東北にはあると思います。私のような若い世代も、新しい「ふるさと」をつくるために活動しています。

## 将来のビジョン

今は仕事と暮らしの拠点が東京になっていますが、将来的には拠点を岩手に移す予定です。そこで、新しい働き方やライフスタイルを実践していくことを楽しみにしています。

そして、岩手（特に地元の一関市）を面白い地域にして、ふるさとに戻つたり戻つてくれたりする仲間を増やすために、ビジネス・マッチとは何か、をテーマに語つていただく。



佐藤 桢平さん

岩手県一関市出身の佐藤楓平さん。東京の大学で学んだ最初の春休みに震災が起つた。大学生活と並行して物資支援を始め、様々な支援活動を続ける中で、「復興」の次のフェーズに向か「ふるさとづくり」をテーマに打ち出し、活動を続けている。地域の本当の素晴らしさとは何か、をテーマに語つていただく。

## 中高校生へのメッセージ

「井の中の蛙になるべからず」という言葉を贈ります。広い世界を見るために、まずは自分がしっかりと動き、アンテナを高くすること。そのことがあなたにも、そして地元にも必要です。そういう感性を持って磨いてください。

# 豊かさとは なんだろう

一般社団法人 re:terra (リテラ) 代表

渡邊 サヤカさん

【岩手県】

ものづくり

モノを  
つくる



## 渡邊さやかさん

渡邊さんは大手企業でコンサルティングをしていた。震災を機に陸前高田に縁が生まれ、地域ブランドを作りたいと思い立ち、気仙椿を使ったハンドクリームの製造販売にこぎ着けた。他国の女性達との幅広いネットワークを持ったバイタリティ溢れる渡邊さんにその思いや取り組みを語っていただく。

**中高校生へのメッセージ**

自分は何がしたいかとか、何をしている時が楽しいかを知る事が大切じゃないかな。あとは勉強も大事だけど、よく遊ぶ事かなと思っています。大人になって思い出すのは勉強の事じゃなくって、あの時あんな風に悩んでいたとかいう経験。自分にとって何か楽しいか、興味があるのかを考えつつ、沢山遊んでください。

## 震災以前のこと

大学、大学院と国際協力を学び、コンサルティング会社に入社しました。3年ぐらいで辞めますと言って会社に入っていたので、4年が経過し、コンサルティング業務以外に、社内でのいろんな社会的な活動もやらせてもらつたので、そろそろ次のキャリアを考えようかな、というタイミングで震災が起きました。

## 震災から現在

震災当日は、都内で米国NPO法人のイベント実施の予定でした。大きな揺れがあつて、イベント会場の近くのテレビで地震の様子が映っているのを見て、これはイベントをやっている場合じゃないと思つて、関係者と連絡を取り合つてイベント自体は中止になりました。

その日の夜から、当日イベントを実施する予定だつた米国NPO法人の中でも、そのNPOで扱つている商品は、今の被災地でも求められるものだという事で、寄付を集める動きが始まつたのです。そのNPOで扱つていたのは、例えばソーラーランタンとかストロー型の簡易浄水器具だつたりしたのですが、そうした安価で社会課題を解決出来るような商品は、途上国だけでなく、被災地でも必要とされるものだよねという事になつたのです。

次の日から、寄付を集める活動が始まつたのですが、その一方で、まずはどこの地域で電気やガスが止まつてゐるか、何に困つていてどんなものを必要としているかというような事を私は調査をする担当になつたのです。

震災後に最初に東北に入ったのは友人がいた福島。その後現地に足を運ぶうちに、被災地の状況は開発途上国に似ているところもある事に気が付きました。なので、緊急支援のフェーズの後は産業支援が必要になるな、と考えました。これまでの自分の経験が生かせるんじゃないかとも思いました。

6月に会社を辞め、様々な人と話をする中で、三陸の沿岸部に自生している気仙椿と出会いました。気仙椿からは良質な油の抽出が出来るの

ですが、地元では一部の実を拾つて食用油にしているだけで、椿の実のほとんどは使われていませんでした。そこで、この種を使って化粧品にする事で、付加価値をつけ、新たな産業に出来ないかと考えました。しかし、現地の方々と事業構築をしていく事は容易ではありませんでした。それでも、地域を元気にしていくためには、経済・産業が必要だという強い信念で粘り強く説得を続けました。商品開発や製造には東北支援に取り組む女性医師の会や化粧品メーカーが協力してくださり、2012年11月に気仙椿ハンドクリームの商品発表をする事が出来ました。

一方、カンボジアの女性が美容技術を身につける場を作ろうという活動にも取り組んでいます。カンボジアでネイルサロンを経営している女性起業家との出会いがきっかけです。カンボジア国内では美容について質の高い技術を教える場がないため、日本から専門の技術者を派遣してサポートしていて、将来は技術を学べる学校を作りたいと考えています。実は私は11歳の時に、初めての海外としてネパールを訪れていました。そこで目にしたのは日本では知る事のなかつた世界でした。子どもながらに感じた「豊かさとは何だろう」という事をその後も常に考えるようになりました。その時に感じた事が、今の私を作つているんですね。経験つて本当に大切だと思います。

## 将来のビジョン

被災地といわれる場所や途上国と言われる場所には、これから社会の在り方のヒントがあるんじゃないかと思つています。都市と地方、あるいは大企業と地域企業は、それぞれのスピード感、それぞれの違つた力を持つてゐる。そして、それぞれ互いの価値観や持つてゐるものを提供し合つたり、学び合つたり出来ると思うんです。私はその橋渡し役としてビジネスを成功させてモデルを作りたい。さらにもう少しアカデミックの力も付けたいと思つています。

# 今の自分の原点を 忘れずに

ものづくり

本田屋本店有限会社 代表取締役

**本田 勝之助**さん

【福島県】

復興  
とは？

## 震災以前のこと

うちは代々青果問屋だったので、家業を継ぐような思いで、農業者のブランディングやその販路開拓など、食のプロデュースの事業を主に取り組んでいます。ことしておおよそ10年目になります。



## 本田 勝之助

株式会社ジエイアール東日本企画が運営する、未来への「じまんの一品づくり」プロジェクトのコーディネーターを務める本田さんは会津若松市の出身。震災後、現代のライフスタイルに合った魅力的な商品を生みだそうと尽力している。数々の地域創生プロジェクトで全国を奔走している本田さんの伝統産業への思いや取り組みを語っていただく。

### 中高校生へのメッセージ

これからの時代はクリエイティブな人なのか、ノン・クリエイティブな人なのか、はっきり分かれる時代。これを求めていた、これが欲しかったというものを思いつき、仲間と一緒につくることが社会に求められると思います。

会津では三つの恩を説くんですよ。一つは両親、もう一つは先生、三つ目が地域。やはり何だかんだ言つても、今の自分がある原点を忘れずに、家族のもとで、家族が喜ぶことを、そして今までお世話になつた先生たちにとつて喜んでくれることを、地域のためになることを、やることが結果的には一番後悔のない人生になるのかなと思っています。

### 将来のビジョン

ブランドでいえば、震災前は、地域の特徴を考えてつくった独自のブランドの数はそれほどなかつたんですが、震災後はそれをしなければもう売れないし、そういう商品を応援したいという人たちが増えました。被災地の中でひたむきに支援をしている人の姿などを見て、商品自体の価値よりも、そこに心を動かされたって人が多いんですよね。物を見る視点が、その先の物を作つている人の取り組みや思いに関心が移つていつたと思います。

ればそれを実感として感じたいと考えたんです。何社も手を挙げてくれました。結果的に難しいという結論に至つた企業も多いのですが、福島に拠点を構えて、復興のために福島のために動いてくれる企業は出てきました。震災以降、「何か力になれば」と言ってくれた人たちの思いは本当に本物で、ある意味一流の方たち、十分な力を持つている人たちが「福島のためになら力になろう」と言つてくれました。

ブランドでいえば、震災前は、地域の特徴を考えてつくった独自のブランドの数はそれほどなかつたんですが、震災後はそれをしなければもう売れないし、そういう商品を応援したいという人たちが増えました。被災地の中でひたむきに支援をしている人の姿などを見て、商品自体の価値よりも、そこに心を動かされたって人が多いんですよね。物を見る視点が、その先の物を作つている人の取り組みや思いに関心が移つていつたと思います。

## ものづくり

復興  
とは？

## 震災以前のこと

24歳の時にIT関係の会社を立ち上げました。私は宮城県山元町の出身ですが、そこから上京して大学に入り、在学中に会社を作つたんです。その会社を10数年経営してきた時に震災が起きました。

## 震災から現在

震災の日は休みで、東京都内の自宅にいました。もの凄く揺れてすぐにテレビをつけました。そうしたら自分が良く知っている町が津波に飲み込まれていく映像が映し出された。驚きました。古里は全壊したのかもしれないと思いました。電話は繋がらませんから、山元町にいる両親の安否すら分からず、とにかく不安でした。震災の翌日か翌々日に、車にありつけの援助物資を積んで山元町へ向かいました。幸い両親は無事でしたが、そこには変わり果てた古里の姿があり、衝撃を受けました。

山元町は人口のおよそ4%の人が亡くなってしまった。生きている自分に出来る事って何だろうと、自問自答しました。まずは出来ることからとボランティア活動を始めました。一旦東京に戻り、経営者仲間やMBAをとるために通っていた大学の仲間と団体を立ち上げ、震災の翌月から毎月ボランティア活動に足を運びました。活動の中で、町の人たちから言われたのは「君たちはビジネスパーソンだ。泥かきはありがたいが、働く場所を作ってくれ」と。その言葉を聞いて、これは自分の使命だと感じましたね。これまで学んだ事を古里の復興のために使わないでどうするんだ、という使命感も湧いてきました。ボランティア活動をしながら、震災前は町の経済を支えていたイチゴの再生に全エネルギーを傾注しました。こう



世界を目指せ  
「ミガキイチゴ」  
株式会社GRA 代表取締役  
岩佐 大輝さん  
【宮城県】



## 岩佐大輝さん

岩佐さんは、故郷の山元町をなんとかしたいという思いから、震災後すぐにNPOとしての活動を開始。被災してほとんどが失われたイチゴの生産現場をなんとか復活させたいと奔走している。学生時代に起業してIT企業を営んでいた岩佐さんに農業の今と未来を語っていただく。

### 中高校生へのメッセージ

食に携わるビジネスというのは、人々の最も重要な生命の基盤を担う歴史的なものです。是非、皆さんに農業や食のビジネスにチャレンジしていただきたい。そういう取り組みを私は全力で応援したいと思います。

### 将来のビジョン

まずは山元町のイチゴ作りを今以上に安定させたい。次に、新しく農業をやろうとしている新規就農者を支援するビジネスをやっていきたい。それと、今インドでもイチゴを生産していますが、他の国々でも需要があるところへ行ってイチゴ作りを始めたい。こんな事に力を入れていきたいと思っています。

して2012年1月、仲間と農業生産法人の株式会社GRAを立ち上げました。

実は震災前まで、古里のために何かしたいという思いはありませんでした。離れて長い年月が経っていましたから、戻つて何かすることは夢にも思わなかった。でも、震災を経験して、あの現場を見て、いろいろな方々と出会つて、たくさんの事を学んで、今こそ東北に身を捧げる時だ、と決意に至ったわけです。

GRAの事業の柱はイチゴの生産と販売です。津波被害を受けた土地に太陽光利用型の植物工場をつくり、栽培しています。農業とITを融合させているんですね。収穫したイチゴは「ミガキイチゴ」というブランド名で全国販売しています。生産だけでなく、ブランディングなども手掛けています。ミガキイチゴは2013年度のグッドデザイン賞を受賞しました。1粒1000円の値段がつくんですよ。

ミガキイチゴで作ったスパークリングワインや化粧品もある。私の仲間は地方を賑やかにしたいという思いが強い人たちが集まっています。イチゴの農業ビジネスは極めて難しいけれども、やりがいがある。それでみんなが団結してここまでやつてきました。

カキ、ホタテの養殖をしながら、森と海との繋がりを伝えるための環境教育プログラムを組んで、子どもたちとキャンプをしたり、学校の野外活動のお手伝いをしたりという活動をしていました。

### 震災から現在

震災が起きた日は海辺で養殖の仕事をしていました。とても大きく揺れて、海を見たら水が既に動き出しているのが分ったんです。船を守ろうと沖に向かいましたが、第一波に巻き込まれて舵が壊れ、漂うだけになってしまったので、海に飛び込んで何とか陸地に泳ぎ着きました。

そこは気仙沼の大島だったんですが、四日間ほどは火災をくい止めるために山肌を削ったり、貯水タンクの水を山まで運んだり、島の人と一緒に活動しました。自衛隊のヘリで内地まで運んでいただいて家に向かいましたが、津波に流されてすべでなくなっていました。幸い実家が流されずに済んだので、冷凍庫にあるものを少しづつ食べていました。

何日かして、NGOやNPO、民間の支援団体の方たちが物資の配布に来られたので、「○○に住んでいるおばあさんは食糧が不足している」などの地元の情報を提供して助けてもらっていました。支援団体の方たちと地元の人たちを繋ぐ役割ですね。震災

## 森と海の 繋がりを伝える

NPO法人 森は海の恋人副理事長  
**畠山 信さん**  
【宮城県】



### 畠山 信さん

畠山さんは、海と森の繋がりにいち早く着目し植林活動などの環境保全活動や、環境教育を実践しているNPO法人森は海の恋人副理事長。被災者と支援者のマッチングから海の調査活動、防潮堤問題への取り組み等、精力的に活動している。2014年4月には舞根森里海研究所を設立。ご自身も牡蠣・ホタテ生産者である畠山さんは自然との共生や繋がりについて語っていただきました。

#### 中高校生へのメッセージ

まずは、色々な問題が世の中にありますと知ること。世の中には色々なデータが存在していますが、それらが真実かどうかを見極めないといけない。そのためには自分で調べるということが最も重要になります。

### 将来のビジョン

森は海の恋人の活動を海外へ広げていきたいですね。環境教育プログラムを海外の方にこの場所で提供するのもいいですし、海外でそういう理念を広げる活動が重要なのかな、と思っています。

# 会津の伝統野菜で 繋がりを広める

くらし

伝統文化を  
生かす・守る

## 長谷川 純一さん

うちは分家なんですが農家の5代目として農業をやつしていました。冬の間はスキー場の仕事もしていて、地震のあつた時も磐梯山の山小屋にいました。

### 震災から現在

かなりの揺れがあり、まずは安全確保のパトロールをし、家族の無事を電話で確認し、消防団に入っているので、対策本部へと向かいました。津波の映像を見て、ひょっとしたら原発が危ないんじゃないかと思つていた矢先、3号機の爆発があり、本当にショックでしたね。

ハウスの葉物を避難所に届けて、喜んでもらつていたんですが、他所の検査で放射能が検出されて福島県全域の野菜がストップしてしまいました。そんな矢先、ある取材で清水君と出会つたんです。

元々、会津伝統野菜を守る会という活動をしていました、地元の農業高校へ教えにも行つていました。震災では辛い事もありましたが、清水君には「会津御種人蔥を育てたい」という熱意と、這い上がるうとする力強さがありました。今では伝統野菜を一緒に育てています。

### 将来のビジョン

行政も何とか伝統野菜を守り育てようとしている。実際に育てる農家は大変な苦労をしなければいけない。でも、個々の農家、地域、集落が繋がる事で力が出てくる。農産物が繋がる事でいろんな人の繋がりも広がる。そんな思いで伝統野菜を作つてていきたいですね。



人と種をつなぐ会津伝統野菜  
**長谷川 純一さん**  
**清水 琢さん（左）**  
【福島県】



長谷川純一さん 清水琢さん

大量生産大量消費の時代の流れで、日本各地の伝統野菜が姿を消しつつある中、長谷川さんは清水さんは震災を機に会津の伝統野菜の大切さを痛感。「人と種をつなぐ会津伝統野菜」を立ち上げた。伝統野菜とその記憶を大切にし、未来を紡ぐとは何か。2人に語つていただく。

### 長谷川さんから 中高生へのメッセージ

農業には未来があります。若いうちに是非、食べ物を育ててみる喜びを体感してください。作物は手を掛けた分だけ応えってくれます。

### 清水さんから 中高生へのメッセージ

食べるという事は人と繋がるという事。時には作っている人に会いに行ってください。そして、バと体を感じる経験をしてください。

### 震災から現在

東京で働いていましたが、6年前に家業の漢方専門薬局を継ごうと喜多方の実家に帰つてきました。契約農家さんに依頼してどくだみなどの薬草を集荷し、それを工場で加工し、医薬品等の原料として出荷するという仕事です。

### 震災以前のこと

地震が起きた時、お茶の焙煎で火を使つていてだったので、大急ぎで火を止めて従業員の安否を確認しました。幸い全員無事でした。震災のあつた2011年、実は我が社は過去最高の売り上げを予定していました。ところが放射能の影響で売り上げは激減してしまいました。会津御種人蔥という江戸時代から続く会津の伝統ある特産品があるのですが、2012年に、作る人が減ったために会津御種人蔥の専門農協が解散するという話が持ち上がり、その中で、加工施設を継ぎませんかという話をいただきました。作る人を増やそうと思い、ベテランの農家を回つて話を聞いたりしていったのですが、これは自分で作るしかないと言ふ念が起きました。作る人を増やそうと思い、ベテランの農家と一緒に農業を始めました。

伝統野菜を守り育てている長谷川さんと出会い、人と種を繋ぐという思いに共感を覚え、会津御種人蔥を会津の人に愛してもらおう、そして国内の人にもつと食べてもらおうという思いを強く持つようになりました。伝統野菜を守り育てている長谷川さんと出会い、人と種を繋ぐという思いに共感を覚え、会津御種人蔥を会津の人に愛してもらおう、そして国内の人にもつと食べてもらおうという思いを強く持つようになりました。伝統野菜を守り育てている長谷川さんと出会い、人と種を繋ぐという思いに共感を覚え、会津御種人蔥を会津の人に愛してもらおう、そして国内の人にもつと食べてもらおうという思いを強く持つようになりました。

# 魚と人を 繋ぎ直す

有限会社 三陸とれたて市場 代表取締役

八木 健一郎

さん



## 震災以前のこと

生まれも育ちも静岡。大学2年の時、キャンパスが三陸町（現在の大船渡市三陸町）にあったので移り住みました。魚の現場に入つてみて凄さや旨さなど驚く事がたくさんあって、消費者の感覚としてマーケットと繋がるんじやないかと思つてホームページを作るアルバイトをして、卒業後に「三陸とれたて市場」を立ち上げました。船にライブカメラをつけて、浜の物語のような事をインターネットで発信し、魚と人を繋ぎ直すような事をやっていました。

## 震災から現在

震災の日はスタッフ全員が社内で作業をしていました。凄く大きな揺れがあつて、津波が来るんじやないかと、皆で海拔300メートルほどの山のてっぺんまで坂道を登りました。頂上まで行ったものの、しばらく経つて町の状況が全く分からなかつたら下りたら、町がまるきり消えています。もの凄い事が起こつたのは認識出来るけれど、何が起こつたのか理解出来ない状況でした。30分ほど前までいた会社も町も、がれきの山になつていたんです。

避難所で一晩明かして翌日、作業をしていた浜の方まで行きました。がれきが溢れていて、一体どこから片づければいいんだと途方に暮れましたね。自分たちで片付けを始め、人的な被害の規模が見えてきたのが地震から3日目ぐらいでした。

それから少し経つて漁業者の方に被害の状況を確認しました。何が残っているのか、がれきがどうなつてているのか、出来る漁業つてあるのかつて。どうすれば最短で立ち上がりつていいのか。避難所の前にテントが張つてあつたんですけど、そこで焚火をしながら皆で意見を交わして励まし合つていました。

そんな中、4月11日に岩手県が復興宣言をするという情報が入



【岩手県】



## 八木 健一郎さん

大学時代に初めて三陸地域にやつてきた八木さんは、漁師

さんたちと新たな試みを次々と実施しながら魚を売つてきました。まだB-to-Cなどは空想もつかない頃に、船上でライブカメラを使って販売したり、京王プラザホテルと組んで食材を開発したりしてきた。震災後は同じレールを敷き直すのではなく、新たにレールを敷き直すことが復興だという八木さんは、新たな日本の水産業について語つていただく。

### 中高校生へのメッセージ

等身大っていうのか、肩肘を張らずに裸の自分でお互いがぶつかり合える時こそ、素晴らしい物が出来上がつてきます。無垢である事の大切さですね。ミサンガがまさにそうでした。子どもの時に持つてゐる無垢な感性を消さないで自分を信じてください。

### 将来的ビジョン

自分たちが三陸の町の中で作つてきた漁業者との関係を、少し離れた場所の漁業者たちとも同じ構造で作つてみて、その漁業者たちが得意とするものがもつと消費の現場を喜ばせるようなツールに出来ないかと考えています。少しずつですが、構造を広げていきたいですね。

くらし

食を守る

## 震災以前のこと

東京の大学を卒業後、故郷の青森に戻り、青森銀行に入行しました。支店長や東京国際部参与を経て、金融派生商品を学ぶために欧米に2年間滞在する機会を得たのですが、そこで「稼げる農業」に出会いました。50歳で退行し、民間企業を経て61歳の時に農業で起業することを決意。若者が夢を描ける農業を目指し、生産から販売までをトータルに行う株式会社グランパを立ち上げ、植物工場「グランパドーム」を開発しました。

## 震災から現在

震災当日は神奈川県秦野市の農場にいたのですが、停電などで交通が大混乱をし、普通なら1時間で帰れる本社に、8時間ぐらい掛かって帰り着きました。車内のラジオから流れるニュースの内容は、現実のこととは思えませんでした。

被災地は津波による塩害などの被害が大きく、農業生産できないし、雇用もない。そこで、太陽光を利用し、高効率で高い収穫量を誇る水耕栽培専用のエアドーム、グランパドームの技術を被災地に持つて行つて、現地の人を雇用し、そこで生産した野菜を販売しようと考えました。これには、陸前高田市の市長が非常に積極的に受け入れをしてくださつて、震災翌年の8月に津波で壊滅的な被害を受けた陸前高田に「グランパファーム陸前高田」を立ち上げました。

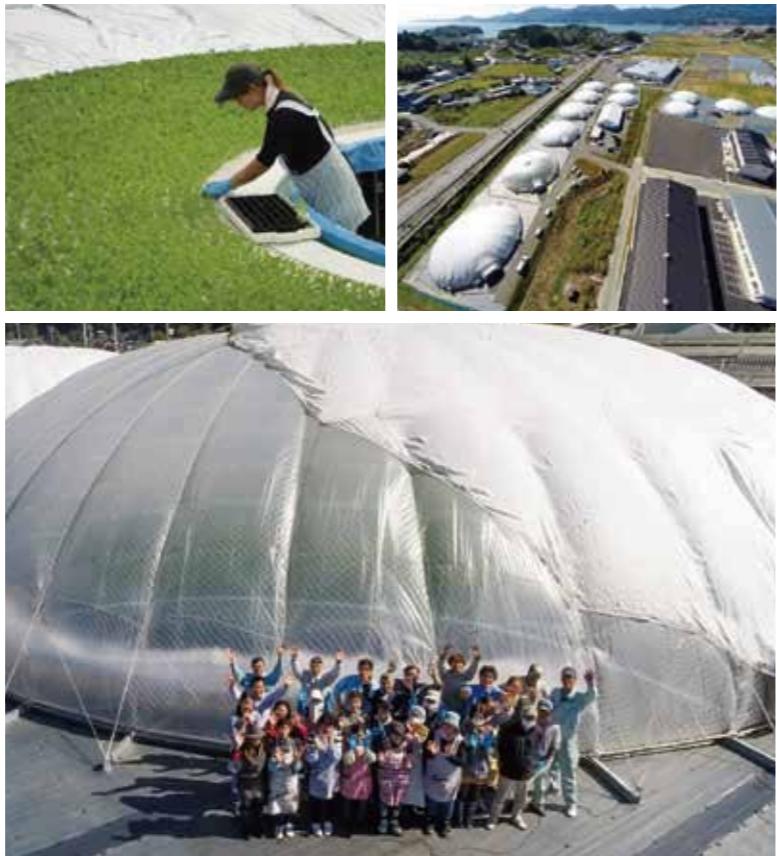
従業員は地元で雇用した18名。被災するまでは水産加工場で働いていた人や主婦の人たちです。それまで農業とは縁のない人たちですから、すべてがゼロからのスタートでしたが、皆が一生懸命仕事を覚えてくれました。グランパドームもはじめは8基でスタートしましたが、今では12基に増えました。

## 若者が夢を 描ける農業を

株式会社グランパ代表取締役社長

阿部 隆昭さん

【神奈川県】



## 阿部 隆昭さん

阿部さんは日本の農業の未来を見据え、長年勤めた銀行を退職。工アドーム式植物工場を開発。グランパファーム陸前高田を立ち上げ、被災地支援として産業の振興、雇用の創出に取り組んでいる。今は軌道に乗っているグランパファームだが、立ち上げにはどのような苦労があったのか、未来を見据えた新しい農業とは、を語つていただく。

### 中高校生へのメッセージ

自分をしっかりと持って、何と言われても頑固に本当に自分の好きな事ややりたい事、欲しいものを追求してください。他の人にとって地味でも、自分にとって大切な事を大事にしてください。

ドーム内では、データ管理された毎日の履歴によって、最適な栽培環境を導いています。生産した野菜は地元のスーパーや生協に出荷していますが、どの野菜も栽培履歴の管理をしていますから、お客様が口にした野菜が、いつどこで、誰が作業をしたか、が分かるよう記録されており、安心して食べていただけます。

今、グランパドームは陸前高田を含め、国内10農場に施設があります。近く、アブダビにも農場が完成する予定です。実は、私たちの取り組みは教科書でも取り上げていただいています。少しずつではありますが、子どもたちの農業に対する考え方が変わる、周りの環境が整つてきていると感じています。

## 将来のビジョン

近年、私たちの暮らしは温暖化、集中豪雨、猛暑、火山の噴火など、異常気象に悩まされています。特に従来の農業は自然に大きく左右され、自然の脅威と常に背中合わせ。旧態依然とした農業では安定生産はできません。その上、日本の農業就業人口の60%以上は65歳以上で、高齢化や後継者不足、耕作放棄地の増加などという大きな課題に直面しています。

このような閉塞した日本の農業を変えるためにも、グランパドームを核とした地域展開を推進し、これまでの農業のイメージを変え、若者が将来の夢を描けるものにしたいと考えています。植物工場の技術や野菜を国内だけでなく、世界各地に積極的に輸出し、農業技術を学びたい外国人留学生の受け皿としての役目も果たしたいと考えています。



# 世なおしは 食なおし

NPO法人東北開墾 代表理事

**高橋 博之さん**

【岩手県】

くらし

食を守る



花巻で生まれ育ち、大学進学で上京しました。当時は新聞記者を目指していて、直接喋れるエピソードがないかと考えていたときに、大学の先輩で代議士をやっている方がいて、事務所を手伝わなかと声をかけていただいたんです。「これは面接受けする」と考え、手伝いを始めました。結局、新聞社はすべて落ちたのですが、このことが政治に興味を持つきっかけになり、29歳のときに郷里に帰って議員を目指しました。帰った次の日には街頭に立ち、演説を始めました。ゼロからのスタートです。31歳のときに岩手県議会議員の補欠選挙で当選し、2期目の途中で震災が起きました。

## 震災から現在

地震が起きたとき、私が委員会室で議案の審議をしていました。審議は中断。テレビの画面を通して目に飛び込んできたのは、人がつくれた町が自然の力で押し流される光景でした。言葉がありませんでした。数日後、食糧などの支援物資を集めて被災した沿岸部に行き、その日から大槌町を拠点に支援活動を始めました。内陸部で育った私はそこで、漁師から初めて直接話を聞き、漁業が直面している問題を深く知ることになりました。

震災の年の7月、岩手県知事選に立候補をすることを決意し、県議を辞職。とにかく現場で被災者一人ひとりと話をしたいと、徒歩で遊説を続けました。結果は落選。完敗でした。それでも、4年後の次の選挙を見据え、また街頭演説を始めました。しかし、言つてしまえば自分の顔と名を売るために口ばかりの選挙活動を見直していました。

している自分に急に嫌気がさし、これまで口で言つてきたことを、実際に自分の手や足を動かしてやつてみたい、と政界引退を決意しました。農家や漁師の近くで仕事をし、形にしたいと決意し、石巻の牡鹿半島にある牡蠣養殖の手伝いを始めました。そこで知つたのはあまりにも安い牡蠣の出荷価格でした。

牡蠣を適正な価格で販売するために、漁業の価値を消費者に伝える取り組みが必要だと考えました。そして誕生したのが食材を特集した記事と、その食材を付録として届ける「東北食べる通信」です。構想からわずか3ヵ月後の2013年7月、創刊しました。この取り組みは全国展開し、今では34の食べる通信があり、9000人以上の読者がいます。

## 将来のビジョン

私は、姉が障害を抱えていたこともあって、子どものころから効率という物差しだけでは測れない豊かさがあるという思いを常に持っていました。震災でその思いが一層強くなり、人間の共通点であり、命の源である「食」を改めて見直すきっかけになりました。そのことが食べる通信誕生の原動力にもなりました。

実は、食べる通信は1誌の購読者は1500人という上限を設けています。目指すところは大量生産や効率主義ではなく、顔が見える関係だからです。1誌ごとの上限を設ける代わりに、全國へさらに展開したいと考えています。まずは100の食べる通信を刊行すること。そして、日本の食の流通の15%は生産者の顔が見えるようにします。



## 高橋 博之さん

岩手県議会議員を務めていた高橋博之さんは、震災直後被災地を訪れる中でNPO法人東北開墾の発足を決意した。「食」をテーマに活動することを決め、「東北食べる通信」という地域の食べ物を付録とした雑誌を創刊した。生産者の哲学や背景を取り上げた雑誌とともに、届けられる新鮮な食材。東北食べる通信の先進的な考え方や、地域社会が抱える課題とそこから見える可能性を語つていただきました。

## ワークシート

パッショング / 情熱

ビジョン / 世界観

ミッション / 使命

スキル / どんな能力が必要でしょうか？

スキーム / どんな仲間がいればできるのでしょうか？

# 東日本大震災復興支援に関する 2020年までの取組方針

三井物産は、東日本大震災の発生から丸5年を迎えるにあたり、復興支援に関する2020年までの取組方針を決定しました。

地域の活性化に貢献し継続性をもって地域に定着する事業活動、ならびに復興を担う次世代の人材育成を中心とする環境・社会貢献活動を通じて、持続可能な支援を引き続き推進し、被災地域の着実な復興と創生に貢献していきます。

案件名	活動内容
気仙沼鹿折加工協同組合	<b>水産加工業の再興支援</b> 販路の再構築や新商売開拓、労働力の確保など、組合運営のための総合的な支援を行います。
仙台うみの杜水族館	<b>地域経済の活性化</b> 「海と人、水と人との、新しいつながりを「うみだす」水族館」をコンセプトに、復興を象徴する新たな観光資源として貢献します。
TOMODACHI & Mitsui & Co. リーダーシッププログラム	<b>次世代リーダー人材育成</b> 日米の若手社会人代表団が日米関係とリーダーシップを学ぶ他、被災県訪問による新たな交流を創出します。
BS12チャンネル「未来への教科書」 出演者による出前授業	<b>キャリア教育</b> 復興・創生を担う子どもたちが「生きる力を育む」ための授業を行います。
宮城県女川町における 英会話プロジェクト	<b>グローバル人材育成</b> 中学生を対象とするスカイプ英会話学習の他、三井物産社員が自らの海外体験を語る特別授業を実施します。
「三井物産環境基金」 研究・活動助成	<b>地球環境問題解決への貢献</b> 大震災により発生した新たな環境問題の改善・解決に取組むNPOや大学への助成を通じて、持続可能な社会、コミュニティの再生を支援します。



仙台うみの杜水族館



BS12チャンネル「未来への教科書」出演者による出前授業

三井物産ウェブサイト「東日本大震災への対応」  
<http://www.mitsui.com/jp/ja/csr/contribution/disaster-relief/>



気付いた事をメモしましょう！

気付いた事をメモしましょう！



360°  
business innovation.

三井物産。それは、人。  
人の意志。人の挑戦。人の創造。  
私たちは、一人ひとりが世界に新たな価値を生みだします。  
世界中の情報を、発想を、技術を、資源を、国をつなぎ、あらゆるビジネスを革新します。  
これからの時代に、新しい豊かさを生み、  
大切な地球とそこに住む人びとの夢あふれる未来をつくっていきます。



MITSUI & CO.

世界の未来を、世界とつくる。三井物産

## 世界をつなぎ、人を育て、地球を守る。 夢あふれる未来作りのために。

三井物産は、「国際交流」「教育」「環境」の3つのテーマを中心に、世界中でさまざまな社会貢献活動を進めています。大切な地球と、そこに住む人びとのこれからのために、私たちができるることを、ひとつひとつ。

**サンクトペテルブルク  
国立大学冠講座**  
ロシアにおいて、日本への理解と相互交流を深める取り組みを行っています。

**北京大学三井創新論壇**  
日中経済および文化交流の促進を目的とした冠講座を開催しています。

**米国三井物産財団の活動**  
教育や地域福祉などの幅広い分野において、アメリカ社会に貢献する活動を進めています。

**ブラジル三井物産基金**  
サンパウロ大学での冠講座開催や、帰国した日系人子弟の現地学校への適応支援などを行っています。

**三井物産「サス学」アカデミー**  
「サス(サステナビリティ)学」とは、未来の担い手である子どもたちが、持続可能(サステナブル)な未来を創る力を育むための学びです。「サス学」を通じ、子どもたちの「未来を創る力」を応援しています。

**三井物産環境基金**  
未来につながる社会を目指して、環境貢献活動を行うNPO/NGOや環境分野の研究を行う大学等の研究者に対し震災復興支援を含めた幅広い助成を行っています。

**森のきょうしつ**  
「三井物産の森」での森林体験や、学校への出前授業に加え、ウェブサイトでも森の役割と木材産業を通じた環境保全を伝えています。

**在日ブラジル人支援活動**  
在日ブラジル人学校児童向け奨学金などの子弟向け教育活動や、NPO団体への支援などを行っています。